

B 型肝炎予防接種について

病気（B 型肝炎）の説明

B 型肝炎ウイルスの感染を受けると、急性肝炎となりそのまま回復する場合もあれば、慢性肝炎となる場合もあります。一部劇症肝炎といって、激しい症状から死に至ることもあります。また、症状としては明らかにならないままウイルスが肝臓内部に潜み、年月を経て慢性肝炎・肝硬変・肝がんなどになることがあります。ことに年齢が小さいほど、急性肝炎の症状は軽いかあるいは症状はあまりはつきりしない一方、ウイルスがそのまま潜んでしまう持続感染の形をとりやすいことが知られています。

B 型肝炎ワクチン（不活化ワクチン）

B 型肝炎ウイルスワクチンによる予防は、ことに小児の場合は肝炎の予防というよりウイルスの持続感染を防ぎ、将来発生するかもしれない慢性肝炎・肝硬変・肝がんを防ごうとすることが最大の目的です。

以前は B 型肝炎ウイルス陽性の母親から生まれた小児に、出生後できるだけ早く抗 HBs 人免疫グロブリンと B 型肝炎ワクチンを母子感染予防事業として接種してきましたが、いまではより多くの人に B 型肝炎ワクチン接種を受けてもらい、将来、慢性肝炎・肝硬変・肝がんで苦しむ人をできるだけ減らすため、定期接種が実施されています。

なお、これまでに行われてきた母子感染予防事業はこれまで通り健康保険で行われています。

副反応について

副反応は、倦怠感、頭痛、局所の腫脹、発赤、疼痛等がみられたと報告されていますが、新生児・乳児についても問題はなく行われています。

接種時期について

	接種可能年齢	標準接種年齢	接種方法
1 回目	1 歳未満	生後 2 か月から 9 か月まで	
2 回目			1 回目の接種から 27 日以上の間隔をあける
3 回目			1 回目の接種から 139 日以上の間隔をあける

※母子感染予防のために抗 HBs 人免疫グロブリンと併用して B 型肝炎ワクチンの接種を受けた場合は健康保険が適用されるため、定期接種の対象外となります。